



## 八味地黄丸

八味地黄丸（以下八味丸）は別名がたくさんあります。金匱要略に「崔氏八味丸、脚気上ツテ小腹ニ入り、不仁スルヲ治ス」とありますが、これは Beriberi つまり単にビタミン B1 欠乏症の意味でなく、足のシビレ・痛み・麻痺といった症候を「脚気」と呼んでいました。症状がだんだんきつくなって、心不全を引きおこして亡くなった人もありました。「脚気上入シ、小腹不仁（下腹に抵抗がない）」の状態の人に八味丸を与えたらいいという意味です。それから次に「虚勞・腰痛」ですが、心身ともに疲労困憊状態の腰痛ですから、元気な人がちょっと無理をして腰が痛くなったというレベルではありません。全く陰陽を異にします。そして「小腹拘急シ」八味丸の一つの目標として、普通は臍下不仁でフニャツとして抵抗がないんですが、時には下腹部の攣急という場合もあります。また、正中芯（正中線上にエンピツの芯程度の抵抗を触れること）があります。これは八味丸だけでなく、附子の適応としての腹証です。このような所見があっても、小便の出ない場合は八味丸を与えます。また「夫レ短気微飲アリ」で、「短気」は呼吸促迫（息切れ）、そして「微飲」（水分が胃内に停滞するのを留飲、横隔膜より上にたまる（胸水））、肋膜腔にたまるものが微飲で、「微」＝わずか、ではないんです。こういう場合は利尿を図らなければなりません。陽証ならば苓桂朮甘湯、陰証ならば八味丸となります。

さらに「男子ノ消渴」とあります。消渴は非常にたくさん水を飲むが、その水がどこかに「消えてしまう」・・・これが「消の病」です。飲んでも飲んでも（尿として）水が出ない、これは五苓散の証で、消渴の中に入ってきます。八味丸の証は、「反ツテ多ク」と小便が出ている。「消」は水が消えることを意味し、飲んだ水がどこへ行ったかわからなくなるのが元の「消」であり、体が非常にやせてくることを「消」と言います。そういうニュアンスを持ちつつ、この場合は「小

便反ッテ多ク」と「反」の意味があるわけです。「一斗＝一升」ですから、一升ほど水を飲んで、その後一升ほど小便を出してしまう。こういう場合に八味丸がいいというわけです。この条文から、「消渴」は尿崩症または糖尿病を意味する、と考えられますが、消渴と江戸時代に理解されていた病態は、尿路感染症を意味します。糖尿病に対して、病名治療として八味丸が使われることがあります、これは間違いです。誤治になりかねないですね。

もう1つは「婦人病、飲食は全く変わりなく（故の如く）、煩熱があつてじつと寝てることができない。反つて起座呼吸（倚息）するのはどういうことか。此を転胞（尿閉）と言う。尿（溺）をすることができないからである。胞系了戾（輸尿管が屈曲捻転）するを以ての故にこの病を致す。ただ小便を利すれば則ち癒ゆ、腎気丸之を主ル。」とあります。八味丸については幾つかの条文がこのよう匠出てきます。

八味丸の症候で、軽症は小腹不仁で小便不利、中等度は小腹拘急して小便不利、それが小便自利となるとかなり進行した状態と考えていいでしょう。病名的に八味丸が一番よく効くというのは、「症状がなくなる」の意味で、それが病気が治っているのかどうかは別問題です。確かに前立腺肥大には、一定効果があると思います。それから、八味丸の解説に「腎虚の病によろし」と書かれています。しかし、傷寒・金匱に「腎虚」の意味は出てきません。八味丸が「腎虚」に対して使われるのは、六味丸が「腎陰虚」に対する薬方として位置づけられたときからです。六味丸は「腎虚して火盛ん」とあります。対して八味丸は「腎の陽陰ともに虚す」ものの薬方と解説が付け加わったわけです。

ところで、「腎」の字の「臣」は目を横から見た象形文字で、どちらか言えば頭を下げた状態の目を横から見たもので、その意味から「君」に対する「臣」になってくる。さらに、かしこまっている意味で「固い」という概念が含まれます。

「又」は「手」で動作をあらわし、「堅」は土が固くなっていること、「緊」は糸で固く結ぶ意味です。つまり「腎」は体の中で固い臓器とみなされていたわけですね。古代、腎の働きをどう考えていたかを素門・靈枢などで見ますと、その字の意味から、腎は何か緊密な組織からできており、体力の元になるもるもろの精を固くとじ込め、充実している臓器と考えられていたようです。そういうことから腎は各臓器に送るべき気（精気）をたくわえ、必要に応じて五臓に気を与えると考えられていました。つまり各臓器にはそれぞれ「肺気」や「心気」といった「気」があり、必要な精気を持っているわけですが、腎は「腎の気」だけであり

ません。これを現代生理学的に考えてみますと新陳代謝機能の調整と考えられ、代表的には血糖維持に関わる肝や膵の働きは重要と考えられますが、こういった肝の働きを「腎」の働きと考えていたようです。あるいは、緊張した状態を保持し、外邪の侵襲に耐えるとも考えていて、下垂体-副腎系の機能も腎の働きと理解されます。さらに「腎気」の意味を思春期・更年期・老年期にまたがることから、性ホルモン分泌も意味します。またさらに、腎は全身の津液の運営（水分代謝調整）を司る腎・尿路系。こういったいろんなものを「腎の働き」とみているわけです。

ところで、「腎の働き」の中で分泌＝水（陰）、機能＝火（陽）という発想法を持ち込み、「陽（火）が虚す」の場合は火の働きがなく水だけがある、「陰（水）が虚す」場合は火の働きだけで、水の分泌が悪いと考えました。ですから「陽虚」（火ができず、水だけがある）の場合、一見体格は肥えた感じだが、芯はサッパリ元気がない（性欲も含めて）、そして腰から下に冷えがある・・・ですから、これは火を燃やす必要があるわけですね。これに対し「陰虚」（火はあるが水はできない）場合、腰から下肢にかけては火照った感じ（熱感）になってくる。高齢になると代謝・分泌は低下してきますから、総体的に分泌低下に比して火（機能）の劣えが少ないため、ちょっとしたことで燃えやすくなり「陰虚シテ火盛ン」となりかねないわけです。

一般的にそう説明されているわけですが、八味丸の場合は「陰（水）・陽（火）」双方が衰えています。一方、六味丸は「陰（水）」が虚した状態で、その陰を補う意味で地黄を与え「水」をつくることでカッカするのを抑えてやるわけです。

八味丸と六味丸の違いは、附子と桂枝が八味丸では加わっていることですが、原文から考えてみますと、八味丸は乾地黄、六味丸は熟地黄が使用されています。乾地黄と熟地黄（まず蒸してから乾燥したもの）では相当作用が違います。漢方には修治といって、生薬を炒ったり、灸ったり、黒焼きにしたりします。この修治が生薬の働きを一定変化させます。甘草も、生の甘草と灸った灸甘草では薬効がかなり違います。こういう修治が古人の知恵としてありますが、この乾地黄と熟地黄の違いが八味丸と六味丸の基本的な違いかと思えます。傷寒・金匱には地黄を含んだ薬方はあまりありませんし、乾地黄は灸甘草湯と八味丸にのみ配合されています。しかし、他の薬方では圧倒的に熟地黄が多く、熟地黄は「養陰・・・陰が足りないので「陰」を養う、「血」を補すという「補血養陰」の働きがあります。これに対し乾地黄は、「乾」つまり「涼」で冷やす力を示します。

いずれも強心作用があり、心筋に作用します。地黄は止血の意味でも使われ、線溶凝固系に関与し、止血の点では凝固系促進作用があります。しかし、単に凝固系だけではなく、線溶系にも作用するようです。この「涼」と「補血養陰」の地黄、この使い分けの問題では、八味丸が本来は「丸」であることに注意していただきたいわけです。これは粉末をハチミツ（水アメではいけません）で練り、梧子桐大（キリの実大）にして服用します。ところが現在は煎剤ですから、多少古典と違った意味合いを考えますが、正証は丸であり、煎剤は多少変化があると考えてください。

一般的に八味丸は「虚勞」で代表され、疲労・倦怠感が強いわけですが、胃腸の働きはそれほど弱くない。水分代謝異常で陽証なら苓桂朮甘湯を使い、それが陰に入った場合に八味丸で利水を図るわけですが、この八味丸を使う人がかつて陽証であったときの体質を考えると、これは大柴胡湯と考えられます。つまり、大柴胡湯を使える人が陰証になったとき、八味丸を使える体質になる。だから、胃腸の働きはむしろよく、下痢傾向や食欲がなくなるなんてことはまずありません。もちろん嘔気・嘔吐もありません。ですから、手足が冷えやすいことはあってもいいですが、むしろ煩熱の要素が強く、舌の所見は暗赤色で、鏡面状（鏡のようにツルツル）で、乳頭の発育が全くなく、苔のない平滑な舌になります。

他に、八味丸については、藤平謙先生は老人性白内障の6~7割にかなり有効と言われていますが、私は眼科ではないので白内障に使った経験は全くありません。

それから「男子の消渴、八味丸之を主る」は、大量の水を飲み、大量の小便をするわけですから、確かに糖尿病や尿崩症の症候を伺わせます。糖尿病では、I型は専門医の先生方にお任せしますが、II型の方には使えると思うんです。しかし、「糖尿病」の病名だけで八味丸を使う可能性は限りなくゼロに近いと考えてください。糖尿病と漢方ということで薬方を考えますと、肥満・脂肪組織が過剰な病人さんを対象と考えた方が、はるかに有効例が多いと思います。その意味でfirst-choiceになる薬方は防風通聖散あるいは大柴胡湯でしょう。これらの薬方が、いわゆる「糖尿病の病人さんに対する薬方」ということになるのではないかと思います。

もう1つ—糖尿病の褐色、血管障害(micro-angiopathy、macro-angiopathy)に対してどう対応するかという問題があります。ここには、血小板の役割の問題、

また血小板とアラキドン酸の代謝、プロスタグランジン系の代謝調整といった問題があります。プロスタグランジンに一定の影響を与える生薬としては、多くの生薬が、系の反応促進や阻止をしていることが明らかにされています。その意味では広義の駆瘀血剤・血虚に対する薬方として、陽証なら桂枝茯苓丸、陰証なら四物湯の兼用が、糖尿病の方の場合はいいように感じています。

いずれにしても八味丸は、腎炎・糖尿病・腰痛その他いろんな疾病に使えますが、基本的には「虚勞」の方に用いられます。しかし、それにしても繁用され過ぎの気はします。

それにもう 1 つ大事なことは、八味丸の効果は出てくるまでにそこそこ時間がかかります。といいますのは、虚勞を強調しましたが、いずれにしても弱っている病人さんに与えるお薬です。葛根湯や麻黄湯を急性熱性疾患に使う場合、30分～1時間たっても効かなかったら考え直さなければいけない。それぐらい効果の早いものです。しかし、八味丸はおよそ2カ月が1つの基準になります。薬屋さんの店頭で「目がかすむ人」「夜、小便の近い方にいい薬あり」なんて書かれています。あれは八味丸です。ただし、看板のような症状の人のすべてに八味丸を出したら苦情が出るのはあたりまえです、「それにしても苦情の数が少ないなあ・・・」と私は思うくらいです。八味丸を自信を持って処方するときは、効果発現まで2カ月かかること、大なり小なり胃の不快感は、辛抱できる程度なら続けて飲んでいただく、「ちょっともたれるから」ですぐやめないことが大事です。2～3週したら必ずもたれ感は消えます。さらに1カ月ぐらいすると、かえって飲みやすい、何となしにいい・・・となり、2カ月で症状がかなりよくなります。だから、そういうつもりで扱っていただきたいと思います。古いお話しでは前漢の武帝が糖尿病で困っていた時に、扁鵲が八味丸を与えて病気を癒した、という曰く付きの薬です。私の師匠の森田幸門先生も糖尿病に八味丸、加減八味丸を与えておられましたが、食養生を厳密に指導されています。つまり、御飯は白米をやめて二分撞き、肉は一切与えない、砂糖も使わない、果物も与えない、油はゴマ油を使う、といった具合です。まあ、こうした食養生と運動があつてこそ、糖尿病をコントロールすることが可能と考えられます。